

## 走れメロス（太宰治）

寺田 守

### 一 作者と作品について

太宰治（一九〇九～一九四八年）は、青森県北津軽郡金木村（現在の青森県五所川原市金木町）に生まれた。本名は津島修治。一九三六年に『晩年』を刊行してから、一九四八年に「グッド・バイ」の執筆途中で入水自殺を行うまで、戦時中も執筆を続けた作家である。『津軽』『斜陽』『人間失格』など多くの代表作がある。

「走れメロス」は、一九四〇年五月に雑誌『新潮』に発表され、同年六月に単行本『女の決闘』に収められた。さらに三年後の一九四三年一月に単行本『富嶽百景』に再録された。

教科書には一九五六年度版中学校二年生教科書に掲載されてから途切れることなく採用され続けている。平成二四年度版中学校国語教科書では全五社に掲載される共通教材となっている。しかし、漢字、仮名づかい、句読点の表記の変更にとどまらない差異が、各社の本文に見られる。出典の異なり、教育的配慮による異なり、漢字の読みの異なりの三点から各社の違いを整理する。

### 出典の違いによる異なり

光村図書と学校図書で「おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。」となっている文が、教育出版、三省堂、東京書籍では「おまえに

は、わしの孤独がわからぬ。」となっている。また、光村図書と学校図書で「どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。」となっている文が、他三社では「どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。」となっている。これらの違いは、出典の違いによるものである。

各社の出典はいずれも筑摩書房の『太宰治全集』となっている。しかし、三種類の全集が筑摩書房から出ており、いずれの全集に依っているかで本文の差が生じている。学校図書、光村図書は、一九五五年に刊行された『太宰治全集3』が出典であり、教育出版、三省堂、東京書籍は、一九八八年の文庫版『太宰治全集3』が出典である。どちらの全集も初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）を底本としていると記載されているが、実際には、一九五五年の『太宰治全集3』では、再録本『富嶽百景』（一九四三年、新潮社）が底本となっている。一九八八年の文庫版『太宰治全集3』は、初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）が底本となっている。

初出雑誌、初版本、再録本といずれも本文に変更が見られる。太宰が生存中の刊行であるため、太宰の手による書き換えだと考えられる。いずれの本文をとるか判断が求められる状況である。しかしながら、各社で本文が異なるのは、実践を共有する上で混乱を招くことになる。各社で共通した本文を掲載することが望ましい。一九九八年に刊行さ



れた『決定版 太宰治全集4』では、初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）が底本となっている。各社とも全集を出典とするならば、最新の全集が同じ出版社から出ているので、『決定版 太宰治全集4』に出典を変更するべきであろう。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

おまえには、わしの孤独がわからぬ。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

おまえには、わしの孤独がわからぬ。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

おまえには、わしの孤独がわからぬ。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし再録本校訂

おまえへには、わしの孤独がわからぬ。

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

おまえには、わしの孤独がわからぬ。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。

初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房） 太宰治全集4（一九九

八年）付録の校異より

おまえへには、わしの孤独がわからぬ。

再録本『富嶽百景』（一九四三年、新潮社） 太宰治全集4（一九九八

年）付録の校異より

おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし再録本校訂

どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

どうか、**「わしも仲間に入れてくれまいか。」**

初版本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房） 太宰治全集4（一九九八年）付録の校異より

どうか、**「わしも仲間に入れてくれまいか。」**

再録本『富嶽百景』（一九四三年、新潮社）

年）付録の校異より 太宰治全集4（一九九八年）付録の校異より

どうか、**「わしも仲間に入れてくれまいか。」**

どうか、**「わしも仲間に入れてくれまいか。」**

#### 教育的配慮と思われる異なり

出典の異なりに関わらず、教科書会社によって手を加えているために異なっている箇所がある。学校図書と教育出版は変更がなく、三省堂、東京書籍、光村図書は、「下賤の者」という言葉を削除している。こうした差は、原文尊重の原則を優先するか、教科書に掲載する言葉の適不適の判断を優先するかによって生じたのだと思われる。これも各社で歩調を合わせて本文をそろえるのが望ましい。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「黙れ、**「下賤の者。」**

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

「黙れ、**「下賤の者。」**

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

「黙れ。」

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

「黙れ。」

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「黙れ。」

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし再録本校訂

「だまれ、**「下賤の者。」**

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

「だまれ、**「下賤の者。」**

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

「だまれ、**「下賤の者。」**

「だまれ、**「下賤の者。」**

漢字の読みの異なり

#### 漢字の読みの異なり

漢字を仮名にひらく際に、異なりが生まれた箇所もある。「嘎れた」という言葉を各社とも仮名に変更しているが、光村図書は「しゃがれた」とし、他四社は「しわがれた」としている。どちらも誤りではないが、あえて異なる本文にする理由もない。四社は文庫版『太宰治全集』に合わせたと思われる。また「呼吸」の振り仮名を、学校図書、教育出版、光村図書は「いき」としている。三省堂、東京書籍は振り仮名を振っていない。また、学校図書と光村図書は、後半に「呼吸」という言葉が出てくるが、そちらには「いき」と振っていない。なぜ

「いき」という読み方が出てきたのか、今回の調査では明らかにできなかった。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑った。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「ばかな。」と暴君は、しやがれた声で低く笑った。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし再録本校訂

「ばかな。」と暴君は、嘎れた声で低く笑った。

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

「ばかな。」と暴君は、嘎（しわが）れた声で低く笑った。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

「ばかな。」と暴君は、嘎れた声で低く笑った。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸（いき）もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸（いき）もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし再録本校訂

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

太宰治全集3文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸（いき）もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書

房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

りに落ちてしまった。

太宰治全集3 文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、**呼吸**もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

太宰治全集3（一九五五年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし初出雑誌・再録本を参照。

メロスは、また、よろよろと歩き出し、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、間もなく床に倒れ伏し、**呼吸**もせぬくらゐの深い眠りに落ちてしまった。

学校図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉が潰れて**しわがれた**声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

教育出版（二四版） 出典『太宰治全集3』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と、大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉が潰れて**しわがれた**声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

三省堂（二四版） 出典『太宰治全集3』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、

り、今、帰ってきた。」と大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉がつぶれて**しわがれた**声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

東京書籍（二四版） 出典『太宰治全集』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉がつぶれて**しわがれた**声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

光村図書（二四版） 出典『太宰治全集3』

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と、大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉がつぶれて**しゃがれた**声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。

太宰治全集4（一九九八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、河出書房）ただし再録本校訂

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、いま、帰って来た。」と大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもりであったが、喉がつぶれて**覆れた**声が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。

太宰治全集3 文庫版（一九八八年） 底本『女の決闘』（一九四〇年、

河出書房）ただし初出雑誌校合、再録本参照

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰って来た。約束のとおり、いま、帰って来た。」と大声で刑場の群衆にむかって叫んだつもり

であったが、喉がつぶれて「**嘎**(しわが)れた声」が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。

太宰治全集3(一九五五年) 底本『女の決闘』(一九四〇年、河出書房)ただし初出雑誌・再録本を参照。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが歸つて来た。約束のとほり、いま、歸つて来た。」と大声で刑場の群衆にむかつて叫んだつもりであったが、喉がつぶれて「**嘎**れた声」が幽かに出たばかり、群衆は、ひとりとして彼の到着に気がつかない。

## 二 叙述について

メロスは激怒した。

「メロスが」でなく「メロスは」とあるので、メロスが既に読者の知っている人物として登場する。「メロスが」だと、「昔々おじいさんとおばあさんがいました。」のように、新たに登場する人物ということになる。老爺に話を聞いてメロスが激怒する場面(聞いて、メロスは激怒した。(一八一頁一七行))を、時間を前後させて冒頭に持つてきているので、「メロスは」という描写になつたのだろう。「激怒した」とあるので、ただ怒つたのでなく、激しく爆発するように怒つた。

のんきなメロスも、だんだん不安になつてきた。

「のんき」とあるので、メロスは、のんびりしていて、あまり物事にこだわらない無頓着な性格である。「だんだん」とあり、一気に不安になつたのでなく、少しずつ不安になつた。また、「なつた」ではなく「なつてきた」とあるので、同様に少しずつ不安になつたことが分かる。

る。

道で会つた若い衆を捕まえて、何かあつたのか、二年前にこの町に来たときは、夜でも皆が歌を歌つて、町はにぎやかであつたはずだが、と質問した。

「何が」でなく「何か」とあるので、メロスは何かがあつたと確信しているわけではない。たまたま寂しいのかもしれないし、二年前の賑やかさのほうに特別だつたのかもしれない、という可能性の中で、原因となる何かがあつたのではないかと不確かながらも疑い、尋ねている。「二年前」とあるので、メロスがシラクスの町に来るのは二年前である。頻繁に来ているわけではない。「夜でも」とあり、二年前には昼はもちろん夜も皆が歌を歌い、にぎやかだつたことが分かる。「はず」とあるので、二年前ににぎやかであつたことをメロスは確かに覚えており、確認している。

メロスは単純な男であつた。

「単純な」とあるので、メロスは考えが面的であり、こうしたら次はどうなるか、どんな影響があるか、など他のことを考えることもない男だと、語り手が評価している。「であつた」と「だつた」とを比べると、難しいのだが、「である」が客観的、「だ」が主観的という傾向がみられることから、メロスを語り手が客観的に評価しているということができる。

買ひ物を背負つたままで、のそのそ王城に入つていった。

「のそのそ」とあり、動作がゆっくりしている様子が分かる。「ま

「とあるので、先ほどと同じ買い物を背負った状態で王城に入った。激怒した状態のまま、他のことは何も考えずに、準備もせずに向かったのだろう。」

**暴君ディオニスは静かに、けれども威厳をもって問い詰めた。**

「静かに」とあるので、大声を出したり、声を荒げたりせず、ゆっくりと言葉を発した。「もって」とあるが、所有するという意味の威厳を持つて、なのか、手段を意味する威厳を以てなのか。どちらともとれるが、『太宰治全集』ではいずれのものも「以て」となっている。ここでは、威厳の力によって問い詰めたという意味となる。言葉をあれこれ投げかけて白状させようとしたのではなく、王の迫力によって白状させようとした。「問い詰めた」とあり、メロスが真実を言うまで厳しく問い続けようとした。

**その王の顔は蒼白で、眉間のしわは刻み込まれたように深かった。**

「その王」とは、威厳を以て問い詰めようとした王。この文で威厳の理由を説明している。「蒼白」とあり、血の気のない青白い顔であることが分かる。「刻み込まれたように」とあるので、比喩であり、まるで彫刻で彫られたかのような眉間のしわだった。いつも眉間にしわをよせるような難しい顔をしていたのだろう。悩みの多い王だということが分かる。

**おまえなどには、わしの孤独の心がわからぬ。**

「など」とあり、王はメロスを特に取り立てて軽んじている。王はメロスのような人間に自分の孤独は分かるはずがない、と考えている。

「には」の「は」からは、他の人間ならば分かるかもしれないが、メロスだけは特に分らないと王が判断していることが分かる。他者から、自分の弱った心を、あたかもすべて理解しているかのように責められる時に、簡単にわかってたまるか、というようなはがゆい思いをするものである。メロスは「町を暴君の手から救うのだ。」としか言っていないにもかかわらず、王は「孤独の心」の話をしている。人を信じていることができないために多くの人間を殺していることがメロスがやってきた理由だと思いがたっている。

**人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。**

メロスは町の老爺の言葉を信じている。王の言い分を聞こうとはしていない。「最も」とあり、数ある悪徳の中で一番の悪徳だとメロスは考えている。「恥ずべき」とあり、人間性や道徳性に反していて、恥じて当然のものだ、と言っている。「悪徳」とは、道徳に反する行為や精神のこと。

**疑うのが正当の心構えなのだ、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。**

「正当の心構え」とは、道理になかった心の準備ということ。「なのだ」とあるので、強い断定。「おまえたち」とあるので、メロスを始めとする民衆。王は人を疑う心が正しいということを民衆に強く説得されたと主張している。二年前から現在までの間に、ディオニスは人を疑ってしまうような何かが民との間にあり、今のような邪知暴虐の王となってしまうた。

人間は、もともと私欲の塊さ。

「もともと」とあるが、副詞の「もともと」には、最初からといった意味や、元からといった意味など、以前の状態にさかのぼって説明しようとする意味がある。王も私欲に流されない人間の姿を、かつては信じていたのだろう。だが今では信じておらず、今になって考えると、人間は以前から私欲の塊だったと考えていることが分かる。

また、「塊さ」とあり、「塊だ」と比べてみると、終助詞の「さ」が軽く言い放つ時に使う言葉だと分かる。「だ」では力強く断定するのに対して、「塊さ」では、熱心に主張する気にもなれない投げやりな王の態度が分かる。

「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

「だって」とあり、他の人たちと同じように、自分もやはり、と王が考えていることが分かる。また「だって」には、例えば「私だって遊びたい。」という発話のように、相手が思っていることに反対する意味もある。ここでは「だって」から、メロスが、王は平和を望んでいないと思っただろうと考えて、そうではない、と否定しようとする王の考えが分かる。わしでさえ。「だが」とあり、言い差し表現になっている。逆接なので、平和を望んでいる王を邪魔するものを説明しようとする言葉が続くことが予想される。

何のための平和だ。

「だ」とあり、平和の目的を強く尋ねている。

「ああ、王はりこうだ。うぬぼれているがよい。私は、ちゃんと死ぬる

覚悟でいるのに。命ごいなど決してしない。ただ、——」と言いかけて、メロスは足元に視線を落とし、瞬時ためらい、「ただ、私に情けをかけたいつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えてください。たった一人の妹に、亭主をもたせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰ってきます。」

「ああ」とあるが、感嘆の声でなく、そうだという肯定の意味。「りこう」とあるが、メロスがはりつけになつてから泣いてわびると勝手に予想していることに対して、利口だと評価している。皮肉であり、本当はメロスは王が利口だとは思っていない。「うぬぼれて」とあり、メロスは王が自分が優れていると思つて得意になつていていると思つている。「いるがよい」とあり、王はうぬぼれている状態がふさわしいとメロスが判断し、勧めている。「ちゃんと」とあるが、「いるのに」を修飾するならば、迷いなどもなく、まちがいに覚悟しているという意味。「死ぬる」を修飾するならば、泣いてわびたりなどせず、きちんと死ぬという意味になる。ここでは、後者だと考えたい。「のに」とあり、終助詞の「のに」は、恨みや不服から相手を責める気持ちを表すことから、ここでは、王がメロスの覚悟を信じてくれないことをメロスが不満に思つていることが分かる。「など」とあるので、メロスは命ごいをするを軽蔑していることが分かる。「ただ」とあり、命ごいを軽んじた直後に、その発言に条件をつけようとしている。命ごいしようとしている。「言いかけて」とあり、ただ、と言った後、すぐに発言を続けずに、言葉を止めた。「足元に」とあり、地面と足の接する部分のあたりに視線を落とした。「瞬時」とあるのでわずかな時間。数秒もたつていないだろう。「ためらい」とあり、続きを言おうか言うまいか迷つている。メロスは自分でも自分の発言の矛盾が分かつていて、



続きを言うことに思い切りがつかないのだろう。「情け」は、ここでは思いやりや哀れみといった心遣いのこと。「かけたい」とあり、王が情けをかけることを希望しているということ。「つもり」とあり、前もってそうしようと考えているということ。つまり、王がメロスに情けをかけたかったと前もって思っていたならば、という意味になる。情けをかけたほしいと頼むのではなく、王がそのように思っていたならば、という言い方となっている。頼むと命ごいになってしまうので、交渉するという形を作ろうとしてメロスはこのような言い方をしたのである。

「ください」とあり、口調がそれまでの常体から敬体に突然変化した。「たった」とあり、一人ということをわずかだと強調するメロスの判断が分かる。同情してもらい、情けをかけてもらおうとしていることが分かる。「必ず」とあり、まちがいはなく、きつと帰ってくると言っている。自分の先の行動を自分で必ずと言う時は、信用できないものである。メロスは情けをかけてもらおうと必死になっている。

**あれを人質としてここに置いていこう。**

「あれ」とあり、セリヌンティウスをあれ呼ばわりしている。人間をあれ、と言う時は、その人物に敬意を持っていない時である。「置いて」とあり、「残して」と比べると、セリヌンティウスを物扱いしていることが分かる。セリヌンティウスのことを軽視しているともとれる表現だが、ここではそれほど深い信頼関係であり、敬意も一切不要な間柄だとメロスが考えていると捉えたい。「いこう」とあるので、メロスの決意が分かる。

それを聞いて王は、残虐な気持ちで、そつとほくそ笑んだ。

「そつと」とあるが、副詞の「そつと」には、こつそりと相手に知られないように少しだけ動作をする意味がある。また、「ほくそ笑んだ」とあるが、動詞の「ほくそ笑む」には、事が思い通りに進み、にやにやと一人で笑うという意味がある。つまり、人を信じる人間が言い出すようなことを、まんまとメロスが必死で言い張るので、王は思惑通りだったのでおかしく感じた。そして、メロスに気づかれない程度にこつそりと、にやにやと少しだけ笑ったという事が分かる。

**メロスは悔しく、じだんだ踏んだ。**

「悔しく」とあるが、何が悔しかったのだろうか。願いを聞いた王は、メロスを信じておらず、助かりたいための方便を言ったと思っている。メロスの心を勝手に見透かしたような言葉に、本当に帰ってくるつもりであるメロスは恥辱を感じたのだろう。ここでは、失敗をあらかじめきれなかったり、後悔をしていたりするわけではない。「じだんだ」とあり、腹が立ち、悔しくて、足をばたばたと激しく何度も踏みつけた。

**ものも言いたくなくなった。**

「も」とあり、「を」と比べると、「も」からは、他のことはもちろんものを言うことすら言いたくなくなったという意味であることが分かる。「なくなった」とあり、王に対してまだ何か働きかけをしようと思っていたが、心をみすかしたような言葉を受けて、働きかけを行う意思を失った。

セリヌンティウスは無言でうなずき、メロスをひしと抱きしめた。



少しでも長くこの家にぐずぐずとどまっていたかった。

「でも」とあり、せめて少しだけであつてもどまりたいとメロスが考えていることが分かる。「ぐずぐず」とあるので、はっきりさせずに、曖昧なまま、のろのろとしてどまっていたと考えている。

今宵呆然、歓喜に酔っているらしい花嫁に近寄り、

「今宵呆然」とあるが、今夜は気が抜けたようにぼんやりしている、という意味。「らしい」とあり、呆然としているのは歓喜に酔っていると思われる、と話者は推測している。

おまえの兄のいちばん嫌いなものは、人を疑うことと、それから、うそをつくことだ。

「いちばん」と言いながら、一見「人を疑うこと」と「うそをつくこと」と二つのことを言っている。しかし、これらは別のことを言っているのではなくて、表裏の関係であり、一つのことを言っているのだと思われる。

おまえの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまえもその誇りをもっている。

「たぶん」とあり、不確かだ断定はできないがおそらく、とメロスは考えている。メロスは自分のことを偉い男だと思っているが、誰からもそのように言われていない。独りよがりの評価だという可能性もある。「たぶん」と判断している。「なのだ」とあるので、メロスは自分が偉い男だと強い確信をもっていて、妹に言い聞かせている。「も」とあり、メロスと同じように、という意味。「ている」とあるの

で、継続的に誇りを持ち続けるように命令している。

花嫁は、夢見心地でうなずいた。

「夢見心地」とあり、夢を見ているよううっとりとした状態でうなずいた。「うなずいた」とあるので、首をたてにふって承諾の合図を送った。

メロスは笑って村人たちにも会釈して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った。

「笑って」とあるので、メロスは愛想をふっている。「にも」とあり、妹と花嫁に対して語りかけたのに加えて、村人たちに対しても会釈した。「もぐり込んで」とあるので、羊小屋は狭く、天井も低いのだろう。「ように」とあり、寝返りをうったり、寝付きが悪かったりということもなく、まるで死んだかのようにびくりともせず寝たことがわかる。

私は、今宵、殺される。

「私は」とあるので、メロスの心の中の言葉だと分かる。「今宵」とあり、今晚という意味の雅語であるが、村の牧人のメロスが使う言葉としては似つかわしくない。メロスは少し気取ったところがある。

殺されるために走るのだ。

「ために」とあるので、殺される目的で走ろうとしている。不合理であるようにも思われるが、続く文で「身代わりの友を救うため」「王の奸佞邪知を打ち破るため」とあり、ただ殺されるのではなく、こうし

た目的のために走ろうとしているのだということが分かる。「のだ」とあり、殺される目的で走ることを強く断定している。自分で自分に言い聞かせているのだろう。

**若いときから名譽を守れ。**

「から」とあり、メロスは名譽を年をとってから守ろうとするのが一般的だと考えていることが分かる。「名譽」は、才能や能力への良い評判、地位や職といった称号を指すが、ここでは人格に対して価値があると認められることを意味している。体面と言い換えることもできる。

**若いメロスは、つらかった。**

「若いメロスは」とあるので、もし若くなければつらくなかっただろうと話者が判断していることが分かる。名譽を守るために殺されるということは、若い人間にとってはつらいことだと話者は考えている。「つらかった」とあり、苦痛を感じて、耐えられなかった。妹や村の人々、故郷への思いが、殺されるために走ることをつらいと感じさせたのだろう。最初の困難は故郷への思いだと言いうことができる。

**ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠を登り、登り切ってほっとしたとき、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。**

「ぜいぜい」とあり、苦しげな呼吸の様子が分かる。走り、川を泳ぎ、峠を登ることで、息が切れている。二つ目の困難は自然だった。「登り切って」とあるので、登り終えて、という意味。あとは下り道しかない。「突然」とあるので、何の前触れもなく躍り出た。メロスも予想

もしていなかった。「躍り出た」とあり、いきなり勢いよく飛び出したことが分かる。山賊はメロスが来るまで見つからないように隠れていた。

**「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」**

「さては」とあり、思いあたることがあった。会話の成り立たない盗賊の言葉に、メロスはおかしいと感じた。しかし、人を疑うことが一番嫌いだというメロスが、おかしいと思いつつも、すぐに王の命令だと判断しているのも奇妙である。すでにメロスは人を疑いかけている。「のだな」とあるので、メロスは自分の判断を強く確信し、相手に念をおしている。

**山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り上げた。**

「ものも」とあり、「ものを」との違いを考えると、ただ黙って振り上げたのではなく、メロスの言葉に、何一つ返事をする事すらなかった、ということが分かる。「一斉に」とあるので、山賊たちがみんなそろって振り上げた。メロスの言葉を合図のように振り上げたことが分かる。本当に王の命令だったため、「ばれたか」というメッセージであるかもしれない。また、本当は王の命令などなく、メロスが何を言っているのか理解できなかったため何も言うことが無かっただけなのかもしれない。真相は不明である。「振り上げた」とあり、手に持っている棍棒を勢いよく上げた。メロスを攻撃しようとする体勢をとった。三つ目の困難は、人間が力尽くで邪魔をしようとするものだった。

**「気の毒だが、正義のためだ！」**

「気の毒」とあり、山賊に苦痛を与えることに同情している。「正義」とは正しい道理のことで、ここでは王との約束を守ること。「ため」とあるので、約束を守る目的で障害となる山賊を殴り倒そうとしている。

愛と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。

「愛」とは、見返りを求めず相手をいづくしむ心である。「信実」とは、偽りがなく正直であることである。メロスはこれまで信実のためには走ってきたが、愛という言葉はここで初めて唐突に出てくる。「血液だけで」とあるが、比喩でありメロスが愛と信実とのみを大切な行動原理としていることが分かる。「やりたい」とあるが、ここで見せたい相手は、メロスを不信の徒だと疑う人々に対してだろう。

友と友の間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。

「いちばん」とあり、メロスは財産や名誉や地位や家族といった他の宝よりも友の信実が価値があると考えている。「から」とあり、前の文の「たまらない」理由を述べている。メロスは最も誇るべき価値のある友と友の間の信実に応えられない状況に対して耐えられない気持ちになっている。「な」とあるので、メロスは念をおし、同意を求めている。ここではメロスが一人で心の中でセリヌンティウスを思い浮かべ、セリヌンティウスに心の中で語りかけている。

私だからできたのだよ。

「だから」とあるので、濁流や山賊を乗り切り、ここまでできたのは、信実を大切に私だったということが理由だと考えている。「よ」とあり、メロスだからここまでできたということを、心の中でセリヌ

ンティウスに念を押しして確認している。

そうだったら、私は、死ぬよりつらい。

「そう」とは、王がメロスを放免するということ。「死ぬより」とあるので、処刑されるよりも放免されることのほうがつらいと考えている。

ああ、もういつそ、悪徳者として生き延びてやろうか。

「ああ」とあり、悲しみでため息をつく様子を表している。「もう」は、「もう最高だ」のように感情が高まったときに使う感動詞と、「もはや」「今となつては」という話者の基準を超えていることを表す副詞と、どちらの意味ともとれる。「いつそ」とあり、思い切つてある方法を決断しようとする気持ちの意味している。「やろう」とは、相手に対して動作を行う意味ではなく、「頑張つてやる」のような強い意思をもっている様子を表している。メロスが王のような生き方を選ぶうとしている。四つ目の困難は、自分の心の弱さだった。

正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない。

「だの」とあり、正義や信実や愛を並べて価値の低いものと判断していることが分かる。「みれば」とあるので、試みに考えたところ、メロスにはくだらないと感じられた。「くだらない」とあり、取り上げて検討する価値のないつまらないものだと考えている。悪徳者として生き延びる可能性を考えてみたところ、そうした生き方では正義などは価値のないものだと思われた。

それが人間世界の定法ではなかったか。

「それ」とは、人を殺して自分が生きるということ。「定法」とは、きまりやしきたりのこと。「なかったか」とあり、反語によつて定法であると主張している。

私は醜い裏切り者だ。

「醜い」とあり、見苦しい、みつともないという意味。「裏切り者」とあるが、ここでは、王との約束を破り、セリヌンティウスを殺して自分が生きるような人間だという意味。

やんぬるかな。

どうしようもない、もうおしまいだ、という意味。

ふと耳に、せんせん、水の流れる音が聞こえた。

「ふと」とあるので、思いがけなく突然聞こえた。まどろみでからどれほどの時間が経ったのだろうか。ちよつとの間眠っていたのだから、数分から数十分ほどだろうか。私たちが短い仮眠をとると元気になるように、メロスもまどろんだ時間のおかげで頭と体が回復した。疲れ切った先ほどは音を聞き取れなかったことから少し元気になったことが分かる。「せんせん」とは、浅い水がさらさらとよどみなく流れる音のこと。漢字にすると潺潺。

よろよろ起き上がって、見ると、岩の裂け目からこんこんと、何か小さくささやきながら清水がわき出ているのである。

「よろよろ」とあり、足どりがしつかりせずによろめきながら起き

上がった。「見ると」とあるので、補助動詞の起き上がってみる、でなく、起き上がってから、見た。「こんこん」とあり、水が尽きることなくわき出る様子を表している。「せんせん」が音だったのに対して、ここでは視覚的な様子を指している。漢字にすると滾滾、または渾渾。「何か」とあるが、ここでは何かを、ということ。「ささやきながら」は、小声でひそひそと言うことだが、ここは擬人法である。まるで何かをささやいているようにせんせんと音を発しながら水がわき出ている様子を表している。「のである」とあり、水の流れる音の原因を強く断定している。

ほうと長いため息が出て、夢から覚めたような気がした。

「ほうと」とあり、息をはく様子。「長い」とあるので、一、二秒の息でなく、四、五秒かかるような、深い呼吸だった。「ため息」とあるが、ここでは失望や感動でなく、大きく深く息をはき出す呼吸を意味している。水を飲み、息をはくことで、メロスは意識がはつきりとした。「ような」とあり、どうやら夢から覚めたような気がした、という不確かな判断を意味する場合と、まるで夢からさめたかのような気がした、という比喻を意味する場合とが考えられる。前者ととれなくもないが、ここでは後者のほうが自然である。先ほどのメロスの迷いを「悪い夢だ」と判断するのは、この後のことである。

我が身を殺して、名誉を守る希望である。

「名誉」とあり、ここでは人格に対して価値があると認められること。人を殺して自分が生きるという考えの逆の論理になっている。

私を待っている人があるのだ。

「ある」とあり、人がいるという意味。「のだ」とあり、強く断定しているが、他者に向かって語っているわけではない。メロスが自分に向かって心の中で語っている。

死んでおわびなどと、気のいいことは言っておられぬ。

「などと」とあり、大体このようなことをという意味。「気のいい」とは、人が良い、気立てが良いという意味。死んでおわびをするといったようなお人好しなことは、今回は言っていられない、ということ。間に合わなかった時のことを考えている場合ではないとメロスは判断している。

私は信頼に報いなければならぬ。

「信頼」とは人を信用してすべてを任せること。ここでは、メロスを信じて待っているということ。走り出した当初のメロスの強い信念が蘇っている。メロスがまどろんだ時には、セリヌンティウスの名前を挙げて葛藤していたが、メロスが元気を取り戻した時にはセリヌンティウスの名前は出てこず、「人」と抽象化して思考している。

走れ！メロス。

題名の言葉がここで出てくる。メロスが自分に向かって激励する言葉である。

やはり、おまえは真の勇者だ。

「やはり」とあり、色々あったが、結局は最初から判断していた通

りの結論だったと再確認していることが分かる。メロスは初めから自分のことを勇者だと思っていた。「真の」とあり、本物のという意味。正直な男のままにして死なせてください。

「ままだ」とあり、元の通りに変わりなく、という意味。生まれたときから正直な男であったので、正直な男である状態の通りに変わりなく死なせて欲しいとメロスは望んでいる。「ください」とあり、常体から敬体に変化している。王との対話の場面の時と同じように、メロスの意思だけではどうにもならず、他者の判断に委ねるときに、メロスは敬体を用いるようだ。

道行く人を押し分け、はね飛ばし、メロスは黒い風のように走った。

「押し分け」とあるので、人を押して無理にどかせた。「はね飛ばし」とあり、勢いよくはじき飛ばした。自分がよけるのではなく、相手を動かして走っていった。「黒い風のように」とあるが、本来風の色はなく、また「黒」という色は悪や闇をイメージさせ、悪魔のささやきを振りきったメロスに似つかわしくない。ここでは、日中駆け続け、日焼けし、汗をかき、汚れたメロスが体中真っ黒だったということだろう。メロスが素早く走っていく様子が「黒い風」のようだった。

愛と誠の力を、今こそ知らせてやるがよい。

「愛」は、見返りを求めず相手をいづくしむ心のこと。「誠」は、嘘やいつわりがない本当の心ということ。以前に「愛と信実」という言葉が出てきており、ここでも同様の意味だと思われる。「今こそ」とあり、過去や未来でなく今まさに、という今を強く主張する意味がある。

「知らせてやる」とあるが、見せてやるとの違いを考えてみる。見せてやるだと、証明してやるという意味になるが、「知らせてやる」だと相手に理解させてやるという意味になる。「よい」とあり、知らせてやるのが適当である、と判断し許可する意味がある。ここから知らせてやりなさい、と促す意味になる。

**呼吸もできず、二度、三度と、口から血が噴き出た。**

「も」とあり、話者が目立たぬもの、予想外で思ってもみななかったものを意識したということが分かる。呼吸は普段は意識することもない程自然なものだが、呼吸ができなくなったことで、はじめてその存在に気づいた。全く呼吸ができなくなったのでなく、うまく呼吸ができず、呼吸を意識するようになった。風体を気にすることもできず、呼吸すらままならないのであるから、深く思考したり、他者と長い会話をしたりすることはもちろんできない。「噴き出た」とあるので勢いよく出た。しかし、喀血や吐血のように、本場に大量の血が出たとすると、走ることができるような状態ではない。血圧が上がったり、荒く深い呼吸をしたりしたために毛細血管が傷つき、唾液に血が混じったのだろう。長距離を走ると、口の中で血の味がするようになる。

**塔楼は、夕日を受けてきらきら光っている。**

「塔楼」は、高くそびえる塔状の建物のこと。ランドマーク。「きらきら」とあり、光を反射して美しく輝く様子が分かる。高い建物であるということと、きらきら光っているということから、メロスは遠くからでも確認できた。

もう、だめでございます。

「もう」とあり、時間が経過して、もはやある状態になっていると判断している。予測ではなくて、フィロストラトスは、すでにだめだと判断している。「だめ」とは、行っても甲斐がないという意味。フィロストラトスは、走っているメロスを理屈で止めようとしている。五つ目の困難は、走る意味を失わせようとする論理だと言うことができる。「ございます」とあり、フィロストラトスはメロスに丁寧語を使っている。

**「いや、まだ日は沈まぬ。」メロスは胸の張り裂ける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。**

「いや」とあり、フィロストラトスの言葉に対してメロスが否定的であることが分かる。「まだ」とあるので、日が沈むまでに、いまなお時間が残されているとメロスは考えている。どれほどの時間が残っているかはメロスにも分からないが、少なくとも今は日が沈んでいない。メロスが同じセリフを二回繰り返しているのはなぜだろうか。それだけ日はまだ沈まぬと強い確信があるから、と考えることができる。また、メロスは走りながらフィロストラトスと話しており、立ち止まって話しているわけではない、という状況もある。つまり、理屈で止めようとするフィロストラトスに対して、冷静に思考して答えたり議論したりすることのできないメロスは、同じセリフを二回繰り返すことで、「だから私を走らせろ」というメッセージをフィロストラトスに送っているのだということができる。

「胸の張り裂ける思いで」とあるので、悲しみや苦痛で胸が裂けるような気持ちを持っている。間に合わないかもしれないと考えると、



メロスは悲しく、辛かった。「ばかり」とあり、フィロストラトスの方  
は見ておらず、夕日だけをずっと見ていることが分かる。

信じられているから走るのだ。

「信じられている」とあり、フィロストラトスの「強い信念を持ち  
続けている様子」という言葉尻を根拠にして、走る理由を述べている。  
「のだ」とあるので、メロスが強く確信していることが分かる。

間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。

「は」とあり、対比的に判断していることが分かる。「間に合う、間  
に合わぬ」は問題でなく、対比的に信じられていることが問題なのだ、  
とメロスは考えている。そもそもメロスは、三日目の日暮れまでに帰  
ってくるために走っているはずである。だから、ここで「間に合う、  
間に合わぬは問題でない」と言うことは矛盾する。メロスは来ますと  
信じられているから走っているという前の文ともつじつまが合わない。  
「もう、だめでございます。」と間に合わないから走るのをやめさせよ  
うとするフィロストラトスの理屈に対して、メロスは間に合うかどう  
かは問題ではない、と乱暴に否定している。

人の命も問題でないのだ。

「も」とあり、「間に合う、間に合わぬ」に加えて、「人の命」でき  
え信じられていることに比べると問題でない、と考えていることが分  
かる。メロスは身代わりとなったセリヌンティウスが処刑されないた  
めに走っているはずである。「もう、あの方をお助けになることはでき  
ません。」と命を救えないから走るのをやめさせようとするフィロスト

ラトスの理屈に対して、メロスは人の命もまた問題ではない、と乱暴  
に否定している。

私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。

「なんだか」とあるので、メロスにもはっきりとした理由はわかっ  
ていない。「もつと」とあり、間に合うかどうかや人の命以上のものだ  
とメロスは考えている。「恐ろしく大きい」とあるが、恐ろしいものだ  
なおかつ大きいものなのか、それとも恐ろしいくらい大きなものな  
か。前者ならばメロスが走る理由は恐ろしいものだということになる。  
後者ならば間に合うかどうかや人の命などよりもはるかに大きなもの  
ということになる。ここでは後者だと考えたい。なぜメロスは自分に  
もはつきりとわかっていないことを「のだ」を繰り返し、強く確信し  
ているように自信たっぷり語っているのだろうか。ここでのメロスは  
走りたいたのであって、フィロストラトスと議論をしたいのではない。  
つまりメロスは、フィロストラトスの理屈を否定し、一方でメロス自  
身にも分かっていない概念を出すことで、論理的に説得しようとする  
フィロストラトスを、詭弁によって煙に巻こうとしている。

ついてこい！フィロストラトス。

「ついてこい」とあり、置いていくのでなくて、一緒に走らせよう  
としている。傍観者であるフィロストラトスを巻き込もうとしている。  
メロスの理屈は筋が通らないので、理解されたいだろうと予想してい  
るのかもしれない。だから理解できなくてもついてくれば分かる、と  
考えてフィロストラトスを一緒に走らせようとしたのだろう。「フィロ  
ストラトス」と名前を呼んでいる。フィロストラトスという名前はフ

イロソフイー (philosophy 哲学) を連想させる。

ただ、わけのわからぬ大きな力に引きずられて走った。

「ただ」とあり、何一つ考えていないのだが、しかし、という意味。「わけのわからぬ」とあるので、メロスには理由が分からない。「引きずられて」とあるので、まるで地面をこするように無理に引つ張られた。つまりメロスの意思ではなく、「大きな力」によって走っている。

メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆をかき分けかき分け、「私だ、刑吏！殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる！」と、かすれた声で精いっぱい叫びながら、ついにはりつけ台に上り、つり上げられてゆく友の両足にかじりついた。

「それ」とは、縄を打たれたセリヌンティウスが徐々につり上げられてゆく様子のこと。「勇」は、物事に恐れない強い心を持っている様子、勇ましいこと。「ように」とあり、濁流を泳いだのと同じ様子で群衆をかき分けた。「かすれた」とあるので、声が喉で響かずに、はつきりした音でなく、聞こえにくい様子。「精いっぱい」とあり、できる限りに、力のある限りにという意味。かすれて、大きな声が出せない中で、できる限りの大きな声を力一杯に出した。「ついに」とあり、とうとうや最後にといった意味で、時間が経過して、期待した結果に到達した、と話者が感じていることが分かる。「かじりついた」とあるので、しっかりとしがみついて、離れないようにする様子が分かる。メロスはつり上げられようとするセリヌンティウスの足にしがみつき、これ以上上げないようにしようとした。

許せ、と口々にわめいた。

「口々に」とあり、めいめいという意味で、大勢の人がそれぞれに言いたいことを言った。あつぱれ、許せといったことを、声をそろえるのでなく、群衆がそれぞれ勝手に言い出した。「わめいた」とあり、大声で叫び、騒いだ。群衆にメロスが到着したことを気づいてもらえた。

私を殴れ。

メロスは自分の心に負けて、くじけそうになったことを、罰してもらおうとしている。

君がもし私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえないのだ。

「さえ」とあり、メロスがセリヌンティウスと喜びを分かち合った、彼に無理な要求をしたことを謝罪したりといった他の行為の可能性の中で、抱擁する資格がまず前提となると考えていることが分かる。そして今は、その資格すらもないと考えている。

セリヌンティウスは、すべてを察した様子でうなずき、刑場いっぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。

「右頬」とはどちらの頬なのだろうか。メロスにとつての右頬ならば、セリヌンティウスは左手で殴ったことになり、左利きだということになる。逆に、セリヌンティウスから見てメロスの右頬を殴ったのなら、そこはメロスにとっては左頬である。一般的には、右手、右

足、右目といった体の左右を表す言葉は、本人にとつての右を差すことが多いように思われる。したがって、ここでは「右頬」を、メロスにとつての右頬と考え、セリヌンティウスは左利きだと考えたい。

また、「音高く」とあることから、大きな音で、あるいはパシンといったような高い音で殴ったことがわかる。セリヌンティウスはグーで殴ったのだろうか、それともパーで殴ったのだろうか。「音高く」を音程の高さだと考えると、パーでしばくような殴り方だと思われる。一方、「殴った」という言葉からは、私たちはグーの映像を想像しやすい。グーで大きな音が出るように殴ると、メロスは大げがをするだろう。ここでは、パーで殴ったのだと考えたい。

私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。

「たった」とあり、回数がわずかであったということ強く主張して、セリヌンティウスが自分でも驚いている様子が分かる。「だけ」とあるので、一度という回数に限定して、それ以上はなかったとはつきり断言するセリヌンティウスの判断が分かる。「ちらと」とあり、一瞬、ちよつとの間、ごくわずかな時間、メロスが帰って来ないのではないかと考えて、疑った。

メロスは腕にうなりをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「うなりをつけて」とあり、力をためて、大きく腕を上げ、そして勢いよく腕を振ったことが分かる。セリヌンティウスはうなずいた後で殴ったが、メロスはいきなり殴っている。

「ありがたい、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからう

れし泣きにおいおい声を放って泣いた。

「同時に」とあるので、同じタイミングで同じ言葉を発した。殴ってくれて許してくれてありがたい、という意味であるだろうし、あるいはまた信頼に伝えてくれてありがたいという意味でもあるだろう。「ひしと」とあり、離れないようにしっかりと密着した。出発の前にも二人はひしと抱き合っている。「うれし泣き」とあるので、うれしさのあまり泣いた。信頼に伝えられたことが二人ともうれしかった。「おいおい」とあり、声をあげて泣きわめく様子。ただ涙を流すのでなくて、声をあげて泣いた。

群衆の中からも、歎歎の音が聞こえた。

「も」とあり、メロスとセリヌンティウスに加えて、群衆の一部も泣いたということが分かる。群衆の全員が泣いたわけではない。「歎歎」とは、すすり泣くこと。メロスとセリヌンティウスがおいおい泣いたのに対して、群衆の一部は、息を鼻から吸い込むようにして声に出さないうで泣いた。

暴君ディオニスは、群衆の背後から二人のさまをまじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

「背後から」とあり、処刑の場所に王はいなかった。距離を置いて眺めていた。「さま」とあるので、二人のやりとりの様子。「まじまじ」とあり、じつと見つめて、見きわめようとしている様子が分かる。王は目をそらしたり、退屈したりすることなく、メロスとセリヌンティウスのやりとりを一部始終注目していた。「やがて」とあり、そのうちに、という意味。「静かに」とあるので、音を立てたり、声を出した

りせず、周りの注目を集めることなく近づいた。「赤らめて」とあり、顔色を赤くした。怒りや恥ずかしさで顔は赤くなるが、ここでの王は、自らを恥じて赤らめたのだろう。

**おまえらの望みはかなったぞ。**

「ら」とあるが、王はメロス以外に誰の望みだと考えているのだろうか。一つにはメロスとセリヌンティウスの二人を指していると考えられる。他方で、この二人だけでなく、群衆・民衆の望みだと王が考えているともいえる。その場合、ここでの王のセリフは直接にはメロスに向けられたものだが、間接的に群衆・民衆に向かって語っているのだということもできる。「望み」とあるが、最初の王との対話では、間に合わなかったらセリヌンティウスを処刑し、間に合えばメロスを処刑するという約束だった。しかし、ここではセリヌンティウスを助け、メロスを処刑する望みという意味ではないのだろう。信実が存在するということ、口だけでなく実際に示すということが、おまえらの望みだということだろう。「かなった」とあるので、望みが実現した。「ぞ」とあり、望みが実現したということ、王が判断し、強く言い切っている。

**おまえらは、わしの心に勝ったのだ。**

「ら」とあり、ここもメロスの他に誰を指しているのが問題となる。「心」とあり、ここでは人を疑う心のこと。メロスが約束を守ったことで、王の人を疑う心が間違っていたことが明らかになった。「のだ」とあり、王は自分で勝ち負けを判断し、強く断言している。

**信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。**

「とは」とあり、信実というテーマについて語っている。「決して」とあるので、打ち消しの判断（ここでは「妄想ではなかった」が間違いないと強く確信する気持ちを表している。「空虚な」とあり、内容がなく、価値がなく、むなししいこと。「妄想」とあるので、根拠がなかったり、ありえなかつたりする主観的な想像や信念のこと。王は信実を中身がなく、価値もない主観的な信念だと考えていた。しかしメロスの行動で、信実が中身があり、価値もある根拠のはっきりとした考えだと納得した。

**どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。**

「どうか」とあるので、王がメロスに丁寧に頼んでいることが分かる。「も」とあり、メロスとセリヌンティウスに加えて、王を入れて欲しいと考えている。「仲間」とあり、ここでは一緒になって信実を示す間柄のこと。王は、人の心を疑わない人間になりたいと頼んでいる。「くれまいか」は、くれないか、という意味であり、メロスに頼んでいる。

**どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。**

「どうか」とあり、前の文に続いて重ねて丁寧に頼んでいる。「ら」とあり、メロスとセリヌンティウスを指している。さらに二人だけでなく、信実を信じる人々全体を指しているともとれる。「してほしい」とあるが、王はメロスと友達になってほしいとお願いしているわけではなく、人の心を疑わない人間になると宣言しているのだと言える。王の依頼にメロスは返事をしていない。信実を信じる仲間に入ること、王のこれからの努力によって認められるものであり、メロス

が許可するようなものではない。

どっと群衆の間に、歓声が起こった。

「どっと」とあり、大勢の人間が一度に声をあげたことが分かる。「歓声」とあるので、喜びで声をあげた。群衆は喜んだ。

「万歳、王様万歳。」

「万歳」とは、めでたい時や嬉しい時に唱える言葉であり、両手を振り上げて言う。群衆は、王が信実を認め、信念を変えたことに喜び、めでたいと感じている。メロス万歳でなく、王様万歳と言っていることから、群衆は王の変化こそ価値があると考えていることが分かる。

このかわいい娘さんは、メロスの裸体を皆に見られるのが、たまたまなく悔しいのだ。

「かわいい」とあるが、容姿が良いという意味でなく、セリヌンテイウスたちに比べて年が若く子どものような存在であるという意味と、マントを持ってきた行動がほほえましいという意味とで用いられている。「たまたまなく」とあり、我慢できないほど、耐えられないほどという意味。「悔しい」とあるので、腹立たしく思っている。少女の意図をメロスが理解していないので、セリヌンテイウスが少女の気持ちを抱きかかっている。

勇者は、ひどく赤面した。

冒頭の「メロスは激怒した。」と呼応している。「走れメロス」は、メロスが勇者になる話であり、激怒した状態からひどく赤面した状態

になる話である。「ひどく」とあり、非常に、とてもという意味で、かすかに赤くなったのでなく、真っ赤になったことが分かる。「赤面」とあるので、恥ずかしさで顔が赤くなった。メロスは裸体を皆に見られていることに初めて気がついた。ここまでは格好を気にしないほど夢中だった。

### 三 考察

「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」というメロスのセリフは、多くの読者の疑問が集中する一文である。「恐ろしく大きいもの」とは何か、疑問に感じ、また重要だと考え、多くの読者がこの一文に注目する。

メロスは王との約束を守るために、殺されるために走っていた。またセリヌンテイウスの処刑に間に合うために走っていた。ところが、フィロストラトスへの言葉で、メロスは突然「間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。」と言い出す。そこで多くの読者は、「いや、今までそのために走っていたのではないか」と疑問を感じる。そこでメロスが「恐ろしく大きいもののため」と言うものだから、読者も「では、それは何か？」と考えてしまう。しかし、前後の文を見てもよく分からないし、最後まで読み終えてもよく分からないために、多くの読者は未解決の問題として、「恐ろしく大きいもの」に〈ひっかかり〉を感じるようになる。

「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」という一文に〈ひっかかり〉を覚える私たち読者は、しかしながら「恐ろしく大きいもの」とは何かを考えようとして、すぐに他の文に目を移してしまいがちである。だが〈ひっかかり〉を覚えたので

あれば、この一文から分かることを立ち止まって考える必要がある。例えばこの文から次のような意味が分かる。

「なんだか」という言葉があるのとないのとを比べてみると、「なんだか」という言葉があることにより、メロスにもはつきりとした理由がわかっているということがある。また「もつと」とあり、間に合うかどうかや人の命と比べて、それ以上のものだともメロスは考えている。「恐ろしく大きい」とあるが、恐ろしいものでなかつ大きいものなのか、それとも恐ろしいくらい大きなものなのか。前者ならばメロスが走る理由は恐ろしいものだということになる。後者ならば間に合うかどうかや人の命などよりも、はるかに大きなものということになる。後の文で「わけのわからぬ大きな力」とあるので、ここでは後者のはるかにという意味の「恐ろしく」だろう。そして「のだ」とあるので、強い確信をもって断定している。つまり、間に合うかどうかや人の命と比べてはるかに大きなもののために走っていると強く確信しているながら、それが何なのか、メロス自身もよく分かっていない、という意味がこの一文から分かる。

実のところ「恐ろしく大きいもの」とは何か、と考えてしまう読者の反応は、メロスがフィロストラトスに期待した反応だった。フィロストラトスも、「恐ろしく大きいもの」とは何か、考え込んでしまっただろう。そしてメロスは、フィロストラトスを黙らせたかったのだ。この時のメロスは、呼吸すらままならず、まして深く思考したり、長い会話をしたりすることはできない状態だった。そこに登場したのがフィロストラトスである。フィロストラトスは、すでに時間が経過していて、もはやだめだと判断し、走っているメロスを理屈で止めようとした。メロスの最後の困難は、走る意味を失わせようとする論理

だったのだと言ってよい。フィロストラトスという名前からはフィロソフィー (Philosophy 哲学) を連想させる。

それに対してメロスは、フィロストラトスの方は見ておらず、夕日だけをずっと見ていた。メロスは走りながらフィロストラトスと話しており、立ち止まって話しているわけではない。つまり、理屈で止めようとするフィロストラトスに対して、冷静に思考して答えたり議論したりすることのできないメロスは、「いや、まだ日は沈まぬ。」と同じセリフを二回繰り返すことで、「だから私を走らせてくれ」というメッセージをフィロストラトスに送ったのだ。

それでも引き下がらないフィロストラトスに対してメロスが発したのが「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」というセリフである。なぜメロスは自分にもはつきりとわかっていないことを、「のだ」を繰り返して、自信たっぷりに語っているのだろうか。ここでのメロスは走りたいたのであって、フィロストラトスと議論をしたのではない。つまりメロスは、フィロストラトスの理屈を否定し、一方でメロス自身にも分かっていない概念を出すことで、論理的に説得しようとするフィロストラトスを、詭弁によって煙に巻こうとしているのだ。メロスの理屈は「なんだか」とあるように、メロス自身にもよく分かっていない。メロス自身もフィロストラトスには理解されないと考えたのだろうし、まさにそれこそがメロスの狙いだった。だから、「ついてこい」と、傍観者であるフィロストラトスを巻き込み、ついてくれば分かるとばかりに一緒に走らせようとしたのだろう。

つまり、「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」という一文によって、メロスは、間に合うかどうかより

も大切なもの、人の命よりも大切なものを説明しようとしているのではなく、「だから私を走らせてくれ」という言外の意味をフィロストラトスに伝えようとしているのだ。最終的に約束を果たしたメロスは、言葉の上だけの信実でなく、その存在を実証できた。しかしそれは後の結果であり、この時のメロスは、ただ一心に走り続けようとする思いだけだった。

